

Title	ロシア語史概説(1) : 序説
Author(s)	石田, 修一
Citation	大阪外国語大学学報. 77 p.1-p.22
Issue Date	1989-03-20
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/81218">https://hdl.handle.net/11094/81218</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ロシア語史概説(1)

## (序説)

石田修一

### Очерк по истории русского языка (1)

#### (Введение)

Сюити ИСИДА

- I. Русский язык и славянские языки
- II. Близость славянских языков и праславянский язык
- III. Процесс расположения праславян и прародина славян
- IV. Древнейшие исторические сведения о славянах

#### 〔I〕 ロシア語とスラヴ諸語

ロシア語は、言うまでもなく、インド・ヨーロッパ語族の一つであるスラヴ語派に属する言語である。今日では、100パーセント有効な分類法とは言い難いが、印欧語の東方グループ、所謂サタム語群に属する言語である。即ち、印欧語の後口蓋音 (gutturales) のうち、口蓋の比較的前方で閉鎖の行われた k, g (palatales) が、印欧語西方グループでは k, g, 東方グループでは s (š), z (ž) として対応することを、〈100〉を表す共通基語 \*k'mtom をテスト・ワードとして、ラテン語ではケントゥム (centum), アヴェスタ語ではサタム (satəm) となることから、k に対応するラテン語を代表者とするケントゥム語群と s に対応するアヴェスタ語を代表者とするサタム語群に分かつのである。スラヴでは、〈100〉は、古スラヴ語 (古代教会スラヴ語) で съто, また今日ロシア語を含むどのスラヴでも [sto] である。従って、この分類から見れば、スラヴはサタム語群だということになる。

さて、世界のスラヴ語総人口は約2億7500万～2億8000万人程度と推定されるが、この普及率は、中国、インド、ゲルマン、ロマンス各言語について世界第5位である。また、ヨーロッパでは最も大きな言語群であり、約2億1000万人の人々によって話されていると言う (因みに、ヨーロッパで

のゲルマン語人口は約1億7500万人、ロマンス語人口は1億5500万人程度とされている)。

また、この大きな言語群である今日のスラヴ語は、さらに次のように分類される諸言語から成っている。言語人口(単位100万)<sup>1)</sup>、主語域とともに示せば、以下の通りになる。

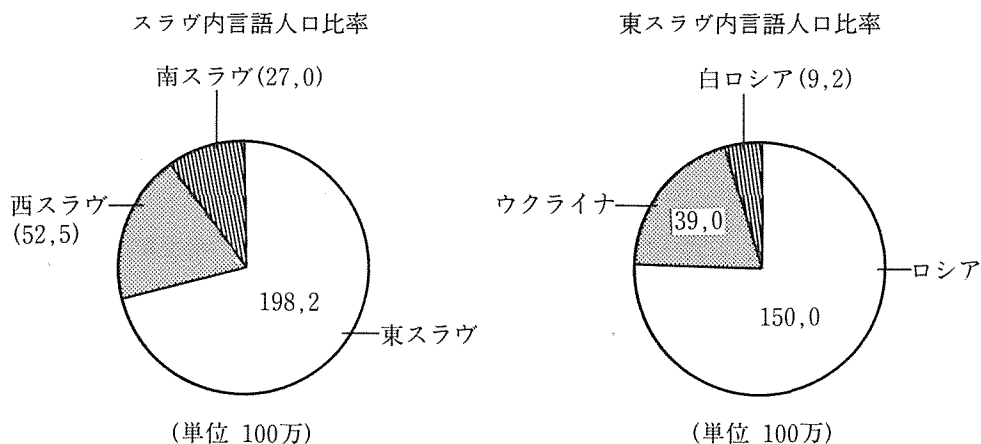
東スラヴ語	ロシア語	150.0	ソ連邦
	ウクライナ語	39.0	ソ連邦(ウクライナ共和国)
	白ロシア語	9.2	ソ連邦(白ロシア共和国)
西スラヴ語	ポーランド語	38.0	ポーランド
	カシューブ語		ポーランド(ヴィスワ川下流, ポメラニア地方)
	高地ソルブ語	0.1	ドイツ(民主共和国/シュプレー川上流)
	低地ソルブ語		ドイツ(民主共和国/シュプレー川下流)
	チェコ語	9.4	チェコ・スロヴァキア(チェコ共和国)
	スロヴァキア語	5.0	チェコ・スロヴァキア(スロヴァキア共和国)
南スラヴ語	スロヴェニア語	2.0	ユーゴ・スラヴィア(スロヴェニア共和国)
	セルボ・クロアチア語	15.8	ユーゴ・スラヴィア(セルビア, クロアチア, ボスニア=ヘルツェゴヴィナ, ツルナ・ゴラ<モンテ・ネグロ>各共和国)
	マケドニア語		ユーゴ・スラヴィア(マケドニア共和国)
	ブルガリア語	8.0	ブルガリア

なお、上記のソルブ語(Sorbian 英/Sorbisch 独—ゾルブ語)はラウジッツ語(Lausitzisch 独)ないしは時としてヴェンド語(Wendisch 独)等の名称でも呼ばれるが、自らはセルブ人(セルブ Serb)・セルブ語(セルブシチーナ Serbsčina)と呼んでいる(cf. この言語では南スラヴのセルビア人を「南セルブ人」<ユージヌィ・セルブ Južny Serb>と呼ぶ)。ロシア語では、セルボ・ルージッツ語<Серболужицкий язык>である。バウツェン(Bautzen, ソルブ語ではブディシン Budyšin)をその文化的中心とする高地ソルブ語(hornjoserbska rěč)とコットブス(Cottbus, ソルブ語ではホシェブス Chošebus)を中心とする低地ソルブ語(dolnoserbska rěč)に分かれる。ドイツ民主共和国政府は、ドイツ語圏に囲まれたこのスラヴ少数民族を保護している。

また、上記以外にも、西スラヴに属する死語として、ボラーブ語、スロヴィンツ語、そして南スラヴに属してロシア語史、ロシア文化史上も極めて重要な古語である古(代)スラヴ語(古代教会スラヴ語/古代ブルガリア語)を挙げることができる(古スラヴ語については、後述)。ボラーブ人は、かつて、上に言うソルブ人の北方、エルベ川(スラヴ名はラバ川)の中・下流地帯とオーデル川(スラヴ名オドラ川)下流地帯に展開し、その言語は18世紀の初頭に至るまで命脈を保っており、少数の文献が残されている。そのボラーブ人の東隣には、バルト海沿岸沿いにスロヴィンツ人が住んでいたが、1890年代には200人程度の言語人口、1911年の算定では、50人弱の人がその言語

を解することが出来たという（セリーシシェフ, А.М. Селищев に拠る)<sup>2)</sup>。このスロヴィンツ人は、上記のカシューブ人と共に、かつてオドラ川下流域とヴィスワ川下流域のバルト海沿岸地帯に展開したポモーシェ族 (Pomorze—沿海地の意) の末裔である。カシューブ人は、20万人程度の言語人口と推定されるが、現在ではその言語はポーランド語への同化が進み、殆どポーランド語の一方言と見なされている。更に、ポーランド語、ソルブ語、ポモーシェの末裔たるスロヴィンツ語、カシューブ語、それにポラブ語を加えて、これをレッヒ (語) 群 (лехитская группа) と呼んでいる。一般に、西スラヴはチェコ (チェク) ・スロヴァキア群と北西スラヴ群に大別されるが、レッヒ群とは、後者即ちかつてバルト海沿岸地帯のヴィスワ、オドラ、ラバ川流域一体に展開した北西スラヴ群を指すのである。

さて、上に示した現在のスラヴ及び東スラヴの各言語人口の比率を円グラフに表せば、以下のようになる。



## 〔Ⅱ〕 スラヴ諸語の近親性・共通性とスラヴ祖語

スラヴ語派がゲルマン、ロマンス語派等の諸言語と異なる大きな特徴は、何と言っても諸言語相互間の著しい近親性、共通性、類似性が未だに保存されている事であろう。それは語彙、音韻、文法構造 (形態、統語法) の全てにわたって観察されるのである。

例えば、語彙の面では、次のように親族名、身体部分の名称、季節、昼夜、自然環境・現象の名称、形容詞、動詞、数詞等の僅かの例を挙げて見ただけで、その類似性に誰でも容易に気付くことが出来る。

ロシア	ウクライナ	白ロシア	ポーランド	チェコ	ブルガリア	セルボ・クロアチア
брат	брат	брат	brat	bratr	брат	брат (brat) 兄弟
сестра	сестра	сястра	siostra	sestra	сестра	сестра (sestra) 姉妹
голова	голова	галава	głowa	hlava	глава	глава (glava) 頭

сердце	серце	сэрца	serce	srdce	сърце	srce (srce) 心 (蔵)
лето	літо	лета	lato	leto	лято	љето (ljeto) 夏, 年
зима	зима	зіма	zima	zima	зима	зима (zima) 冬
день	день	дзень	dzień	den	ден	дан (dan) 日 (昼)
вечер	вечір	вечар	wieczór	večer	вечер	вече (veče) 夕方, 晩
вода	вода	вада	woda	voda	вода	вода (voda) 水
озеро	озеро	возера	jezero	jezero	езеро	језеро (jezero) 湖
рыба	риба	рыба	ryba	ryba	риба	риба (riba) 魚
сладкий	солодкий	салодкі	śłodki	sladky	сладък	сладак (sladak) 甘い
старый	старий	стары	stary	stary	стар	стар (star) 古い
писать	писати	пісаць	pisać	psat(i)	пиша	писати (pisati) 書く
ходить	ходити	хадзіць	chodzić	chodit(i)	ходя	ходити (hoditi) 歩く
два	два	два	dwa	dva	два	два (dva) 二
семь	сім	сем	siedem	sedm	седем	седам (sedam) 七
я	я	я	ja	ja	аз	ja (ja) 私
без	без	без	bez	bez	без	без (bez) ~なしに

形態面の近似性についても同様である。以下に名詞と動詞のパラダイムの例を挙げる。

(名詞例)		ロシア	ポーランド	チェコ	セルボ・クロアチア
単数	1 主格	корова	krowa	krava	крава (krava) (雌牛)
	2 生格	ы	y	y	e ( e)
	3 与格	e	ie	ě	и ( i)
	4 対格	y	ę	u	y ( u)
	5 造格	ой	ą	ou	ом ( om)
	6 前置格	e	ie	ě	и ( i)
	7 呼格		o!	o!	o! ( o!)
複数	1	ы	y	y	e ( e)
	2	—	krów—	—	a ( a)
	3	ам	om	am	ама ( ama)
	4	—	y	y	e ( e)
	5	ами	ami	ami	ама ( ama)
	6	ах	ach	ach	ама ( ama)

(動詞例)		ロシア	ポーランド	チェコ	ブルガリア	セルボ・クロアチア
単数	1 人称	плету	plotę	pletu	плета	плетем (pletem) (編む)
	2	ёшь	pleciesz	eš	еш	еш ( eš)
	3	ёт	plecie	e	е	е ( e)
複数	1	ём	pleciemy	eme	ем	емо ( emo)
	2	ёте	pleciecie	ete	ете	ете ( ete)
	3	ут	plotą	ou	ат	у ( u)

シンタクス面でも、例えば、в, на+場所の前置格において、あるいはまた造格の道具・手段を表す格（具格 Instrumental case）としての機能等においても共通性が認められる。

(ロシア) живу в Москве. сижу на стуле. пишу карандашом.

(セルボ・クロアチア) станујем у Москви. седим на столици. пишем руком.

(ポーランド) mieszkam w Moskwie. siedzę na ławie. pieczę ołówkiem.

(チェコ) bydlím v Moskvě. sedím na židli. píšu tužkou.

ポーランドのスラヴ学者レール・スプワヴィンスキ (Lehr-Spławinski, T.) によれば、現代ポーランド語の語彙の内約1700語強は共通スラヴ起源のものであり、その内訳は1000語の名詞、460語の動詞、170語の形容詞であり、その他80語が別の品詞であると云う。また、その語彙の10分の1は人間の内面・精神生活に関わるもの、10分の8強は外界、物質界、自然界に関わるものである、としている。更に約100語程が文法関係を表現するもの、即ち代名詞、接続詞、前置詞、数詞なのだ、と言う。この事情は、大体他のスラヴ諸語においても同じであろう<sup>3)</sup>。ソヴィエトのロシア語学者ガールキナ＝フェダルーク (Галкина-Федорук, Е.М.) も、共通スラヴ起源のロシア語の語彙は現在2000弱であるが、それらは日常生活において最も使用頻度の高い単語であり、日常使用語彙の4分の1以上に達する、としている<sup>4)</sup>。従って、スラヴの人々は意識的な学習を通じなくても、互いに大雑把な意志疎通ならば、現在でも可能な場面が多いと想定される。このことから、ロシア語を初めとするスラヴ諸語の一つでも学習する事がもたらす利益の大きさは測り知れないものがあることが判るのである。

いま共通スラヴ起源と言う言葉を使用したのが、こうしたスラヴ諸語の共時的、通時的比較が教えるその共通性、近親性の事実によって、我々は、これら現代のスラヴ諸語がある単一の共通の言語から分化、発展して来たことを知るのである。そしてその単一の言語を称して、我々は、スラヴ祖語、スラヴ基語、原始スラヴ語 (праславянский язык, славянский праязык, славянский язык-основа, Urslavisch), ないしは共通スラヴ語 (общеславянский язык, Slave commun) と呼んでいる。一方このスラヴ祖語自体は、印欧祖語 (праиндоевропейский язык, индоевропейский праязык, общиндоевропейский язык-основа, Proto-Indo-European) の分化の結果であると推定されてい

る。尤もどちらも実際に文証される訳ではないが、印欧祖語に比べれば、スラヴ祖語の方は古スラヴ語の介在を通してよほど現実感をもって意識されるのである。

ところで、印欧語の中でスラヴ語派と最も深い関係を持つとされるのがバルト語派の言語、即ちリトアニア語、ラトヴィア語（所謂東バルト諸語、何れもソ連邦リトアニア共和国、ラトヴィア共和国の国語）及び死語であるヤトヴァギ族（ネマン川と西ブグ川の間の地に居住した）、ゴリャヂ族（12～13世紀までモスクワ川とオカ川の間の地に居住した）の言語と古プロシア語（ヤトヴァギの西、バルト海南沿岸地帯に18世紀まで存続）（これらヤトヴァギ、ゴリャヂ、古プロシアの三語を西バルト諸語と称する）である。このことはほんの数例の語根の対応関係を見ただけでも、事態は想像出来るであろう。例えば、南スラヴ諸語やチェコ語、スロヴァキア語の [vrata]（ドア、或いは門）、ロシア語 **ворота**（門）、ポーランド語及びソルブ語 **wrota**（門）等のスラヴ祖語再建形 \*varta はリトアニア語 **vartai** に対応する他、ロシア語を含むスラヴ諸語の [noga]（足）はリトアニア語において **naga**（ひづめ）、同様にして **голова**—**galva**（頭）、**рука**—**ranka**（手）（cf. **riñkti**=集める）等等である。その他文法現象等においても多くの共通項が認められる。こうした事情のため、概して初期の印欧語学者の中には、印欧語からスラヴ語に至る分化の過程に、先ず単一のバルト・スラヴ語（**балто-славянское языковое единство**）の時期を想定し、そこからバルト祖語とスラヴ祖語が分化した、とするものがり、この考え方は19世紀中葉から20世紀初頭～中葉まで約100年間にわたって有力であった。また、近年、スラヴ祖語は古代バルト語集団から分化してある時期より独自の発展過程を歩み始めた方言から形成された、と主張するものもある。バルト・スラヴ祖語の仮説に初めて疑問を呈したのはラトヴィアの言語学者エンゼリン（**Endzerin, J.**）（1911年）である。メイエ（**Meillet, A.**）もまたバルト・スラヴ祖語の設定には反対している。しかし、バルト・スラヴの共同関係（**балто-славянская общность/сообщность**）あるいはスラヴ祖語と古代バルト諸方言の接触関係の発展時期が存在したであろうことを疑う者は誰もいない。ベルンシュタイン（**Бернштейн, С. Б.**）に依れば、そうした接触関係の発生は紀元前2000年紀中期に始まり、紀元前1000年紀中期には完了した、としている<sup>5)</sup>。スラヴ語に特に近いと考えられているのが上記の西バルト諸語であるが、その近似性を説明して、ゴルヌンク（**Горнунг, Б. В.**）は、プロシア、ヤトヴァギ、ゴリャヂ族の祖先即ち西バルト人は初めスラヴ人の祖先と同一連合関係にあったが、のちそこから離脱してリトアニア人、ラトヴィア人即ち東バルト人と接近した、としている。問題の決着はついていないが、これによって考えられることは、スラヴ祖語の成立と発展の時期に対して、西バルト語はスラヴ祖語と東バルト語との間に介在する中間的・過渡的な性格を持ったものである、ということになる<sup>6)</sup>。

### 〔Ⅲ〕 最古のスラヴ人の分化過程とスラヴ居住地

印欧祖語が方言的分化を始めるのは、一体いつごろのことなのか？ある者は紀元前2500年頃と言

い、またある者は紀元前3000年頃のことだと言う。中には、それを紀元前4000～5000年紀に設定する印欧語学者もある。フィリン (Филин, С. П.) は、諸説を検討、総合して、崩壊以前の印欧語は少なくとも紀元前5000～4000年紀には未だ言語的共通性を保っていたが、紀元前3000年紀～2000年紀初め頃には既に印欧語族は互いに数千キロメートル隔たった地（例えば、現在のインド、イラン、中央アジア、トルコ、南ロシアのステップ地帯等）に分散して、同一起源ではあるが同一ではない言語を使用していた、としている<sup>7)</sup>。しかし、勿論、印欧語の崩壊過程と各語派の成立過程は極めて長期かつ複雑なものであった、と考えられる。

スラヴ語の印欧語からの分化の時期についても諸説が存在して定かではないが、その分化の端緒となる時期は恐らく紀元前3000紀初め頃のことであったろうと推定されている<sup>8)</sup>。また、このスラヴ祖語は、大方のスラヴ学者が認知している通り、紀元後1000年紀中期頃まではその統一を維持していたのであるから、スラヴ語は少なくとも3000年以上の間その統一性、単一性を保存した、ということになる。従って、これと比較すれば、現在の個々のスラヴ諸語の歴史はまるで始まったばかりである、ということになろう。

さて、上記のことに関連して、一体これら最古のスラヴ人達はもともとどの地域に居住していたのであろうか？即ち原始スラヴ人の時間的限界に加えて、空間的限界が問題になるのである。所謂スラヴ居住地 (славянская прародина) 問題である。

ソヴィエト、ポーランド、チェコ・スロヴァキアの考古学者達の推定に従えば、最古のスラヴ人は農耕・牧畜に従事する、縄文式土器文化の担い手であって、紀元前3000年紀末から2000年紀にかけて、西はオドラ川から東はドネプル川まで、北はバルト海から南はカルパチア山脈に至る広大な地域に居住しており、また、紀元前2000年紀末から1000年紀にかけて、ここには「骨壺墓原」(поле погребений ないしは поле погребальных урн) 文化と称される火葬埋葬様式をもった多数の種族が続いて来たのであり、それが初期のスラヴ人である、という。そして、このスラヴ人（のものとされる）文化は紀元前1000年紀頃には、概ね西方即ちヴィスワ、オドラ川流域の所謂ラウジツ文化と東方即ちドネプル川流域の文化に二分されるのである。さらに紀元前1000年紀末から紀元前後にかけて、だいたい前者の地ではブシェヴォルスク文化が（紀元前2～紀元2世紀）、後者の地ではザルービンツィ文化（紀元前2～紀元2世紀）とチェルニャホーフ文化（紀元2～4世紀）がこの墓原文化を継承するのであるが、考古学者達はこれをスラヴの最初の東西グループの分化に比定するのである。しかし、この場合、考古学的遡及法によって同一ないしは同類のものであるとされる文化の民族的・言語的所屬を認定する為の決め手に欠けるため、上記の諸文化が純粹にスラヴ人の文化であったかどうかは確定しがたい。それは、先史時代のスラヴ人について記述した文献資料が乏しく、しかも紀元1世紀の、初めてスラヴについての情報を伝える史料さえもスラヴ人自身の筆になるものではなく、ローマやヴィザンツの人々の手になるものであったという事情によって尚更である。

勿論スラヴ居住地問題の論争では言語学者達が重要な役割を担って来た。先ず第一にシャーフマ



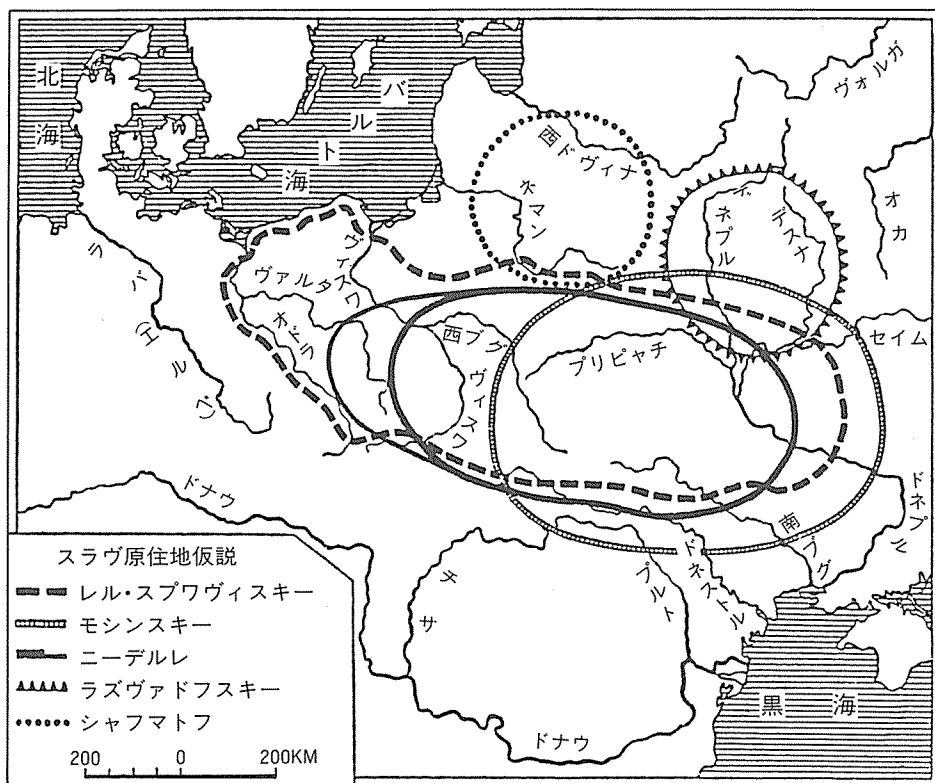
トフ (Шахматов, А. А.) を挙げるべきであろう。彼は、スラヴ語の植物名ブーク (бук, ぶな), チース (тис, いちい), プリュース (плющ, きづた) の分布圏とモーリエ (more, 海) の位置から原住地を推定しようとしたのである。ブークは本来ゲルマン系の単語 (\*bōkō, cf. 現代ドイツ語 Buche) であり、スラヴ人が (バルト人も) もともと知らない植物であるのに対して、チースとプリューンは原初的にスラヴ語であるから、スラヴ人は、チースとプリューンが生育し、ブークが見られない地域に居住していた、というのである。また、モーリエという単語はスラヴにもバルトにも共通であるが、スラヴ人にとってはこれが「海」であっても、バルト諸語ではこれに相当する語根 (marēs, リトアニア語 mārios) は「海」ではなく「湖」のことであり、極く特殊な場合にのみ「リガ湾」を指すという。そしてバルト語で「海」を表す時には別の語 (リトアニア語 jūra) を用いるのである。このことは、スラヴ人が沿海地帯に居住していた時に、バルト人はそこから東部へ押し出されたということを意味するのだという。シャフマートフは単一のバルト・スラヴ語構想の熱心な擁護者であったが、こうして紀元前2000年紀中期にスラヴ人とバルト人は分裂していく、と考えたのである。そしてこの時期スラヴ人は、「ぶな」の木がなく「いちい」と「きづた」が生育し、かつ「海」に近い、という条件を満たす地点、即ちネマン川 (ニーマン川) 下流と西ドヴィナ川下流 (現在のラトヴィア共和国国内での名称はダウガヴァ川) に挟まれるバルト海東部沿岸域に住んだ、というのである。シャフマートフは、これを「スラヴ人第一原住地」 (первая прародина Славян) と呼んでいる。また上記のように、スラヴ人の東隣にはバルト人が、西、南西、南部にはゲルマン人が居たことになるが、ゲルマン人が紀元2世紀頃から南に向かってドネストル川流域へ移動するに伴い、スラヴ人も南西方向へ拡張してヴィスワ川水域を占めるに至った。これが「スラヴ人第二原住地」 (вторая прародина Славян) である。紀元5世紀末スラヴ人はここから二群、即ち西群と南東群に分かれ、前者は西進してエルベ川 (ラバ川) を越え、後者はその後やや遅れて紀元6世紀の初め頃南進して、北東部はプリピャチ川とドネブル川の分水域から、南部はドゥナウ川と黒海北岸のデルタにまで達するのである。こうして、後者は東スラヴと南スラヴに分かれるのであり、これがヴィザンツの作家プロコピオスの言うアント人とスクラヴェン人 (後述) である、という。そして、南スラヴ人はバルカン半島を、アント人はブルト川からドネブル川の間地を占めるに至る。このアント人の地こそ「ロシア人第一原住地」であるが、その後遊牧民アヴァール族に押されてドネブル、ドネストル川沿いに北上し、現在のヴォリーニャ、キエフシーナの辺りに達する。これが、「ロシア人第二原住地」である、という。概してこのシャフマートフ仮説は今日では受け入れられていないが、その方法論はその後の研究者達に大きな示唆を与えることになったのである<sup>9)</sup>。

何れにしろ、スラヴ原住地問題についてスラヴィストの間に意見の統一はないが、現在では過去における程大きな違いはないと考えられる。上のシャフマートフ説、また、かつてはよく言われた所謂カルパチア山原住地説 (карпатская теория) も今日では排除されているが、原住地は大体平均的にはオドラ川とドネブル川に挟まれる地に絞られて来ている、と考えられる。今日対立する学説は、大別すれば二つ、即ちヴィスワ・オドラ説 (висло-одерская теория) とヴィスワ・ドネブル説

(висло-днепровская теория) であるが、概して後者が有力である<sup>10)</sup>。

ヴィスワ・オドラ説は、レル・スプワヴィンスキーを初めとする、主としてポーランド人学者によって提唱されたものである。それによれば、最古のスラヴ人は、先ずヴィスワ川とオドラ川（オーデル川）の間に居住し始め（その時期は不明であるが、大体紀元前2000年紀中頃）、紀元1世紀頃（紀元開始以後日の浅い頃）より、現在のポーランドの地を離れて、南はカルパチア山脈とハンガリア低地を越えドナウ川及びバルカン半島へ、東はドネプル川及びそれ以東へ、そして一部は西方向へも広がった、というのである。ポーランド人学者は、現在のポーランドの地こそスラヴ人の発祥地だという意味で、この仮説を「原住地 (autochton) 説」と呼んでいる。

ヴィスワ・ドネプル説の代表者はチェコ人学者ニーデルレ (Niederle, L.) である。その他ポーランド人学者モシンスキー (Moszyński, K.), ペテルブルグ生まれのドイツ人学者ファスマー (Vasmer, M.), 革命前のロシア人学者セリーシシェフ (Селищев, Ф.М.) 等もヴィスワ・ドネプル説の支持者だとすることが出来よう。ニーデルレによれば、紀元前後のスラヴ人の居住地は、西はヴィスワ川、東はドネプル川中流まで、また北限はプリピャチ川とマゾフシェ湖沼帯（ヴィスワ中流及びナーレフ川、ブグ川下流地帯）—これより北にはバルト人が居住—、南限はカルパチア山麓であった。現在の地理で言えば、おおよそ白ロシア南部からウクライナ北部（ドネプル川以西）にかけての地域



であった、ということになろう。上図はスラヴ原住地構想を表したものである<sup>11)</sup>。

ソヴィエトの言語学者フィリン (Филин, Ф. П.) のドネプル中流・西ブグ (ポレーシェ・ヴィルィニ) 説も、大体上に言うヴィスワ・ドネプル説の想定する地域と相重なる、と考えられる。従って、フィリン自身はニーデルレ、ファスマー、モシンスキー等を含めて、ドネプル中流説 (среднеднепровская гипотеза) と呼んでいる<sup>12)</sup>。原住地問題についてのフィリンの研究は、「東スラヴ語の成立」(1962) や「ロシア語、ウクライナ語、白ロシア語の起源」(1972) 等に等しいが、彼は、「東スラヴ語の成立」の中で、再建されたスラヴ祖語の自然環境 (動物、植物、地理等) に関する語彙や隣接種族との関係を表す語彙資料を検討した上で、①原住地は、少なくともスラヴ祖語の最終段階に入って、海、山、ステップから離れ、湖や沼沢の多い温和な森林地帯に位置したであろうこと<sup>13)</sup>、②バルト語やイラン語との関係は深い、ゲルマン語やフィン・ウゴル語との結びつきは弱いこと<sup>14)</sup>、を明らかにした。即ち、スラヴ祖語には、森林、沼沢に生活圏を持つ鳥獣類や温和な森林地帯の樹木、植物、魚類の名称が豊かである反面、海、山、ステップの特徴を指し示すような名称が存在しないことが判明したのである。これにより、「湖と沼地がある温和な森林地帯」を持った地域、即ち①の条件に合致する範囲は「西はエルベ、オーデル中流から、東はデスナ川に達する広大な空間」であり、また②より、スラヴ人はバルト人とイラン人に挟まれた地域を占め、ゲルマン人やフィン・ウゴル人とはバルト族等によって隔てられていた、という推論が可能になるのである。以上によって、フィリンは、「紀元前1000年紀後半の共通スラヴ族は、西ブグ上流からドネプル中流にかけての森林平野部を占めた」<sup>15)</sup>という結論を下したのである。しかし、やがて紀元前1000年紀末にはスラヴ族の移動は次第に活発になり始め、逐には単一のスラヴ祖語は崩壊の運命を辿るのである。こうして、紀元後間もなく「ウェネディ」(後述) 等の名称で呼ばれるスラヴ人が、ヴィスワ水域やバルト海沿岸地帯に出現し、そこでゲルマン人に遭遇することになるのである<sup>16)</sup>。

#### 〔Ⅳ〕 スラヴ人についての最古の文献史料

スラヴ人が記述された歴史の中に登場して来るのは、かなり遅い時期、即ち紀元以後のことである。エジプトやメソポタミア、即ち「日出ずる所」たるオリエントに、古代オリエント文明が隆盛であった頃、スラヴ人は未だ「野蛮」(Wildheit, дикость) ないしは「未開」(Barbarei, варварство) の低段階 (Unterstufe) の域を脱していなかったのである<sup>17)</sup>。また、古典ギリシャの人達も勿論彼らについての知識を持たなかった訳で、当時の東ヨーロッパの諸種族、諸民属について書いたヘロドトス (前5世紀) の著作の中にスラヴ人についての記述を見出そうとする試みも過去何回か繰り返されたが、成功しているとは言えない。

しかし、上述のように、紀元1000年紀の前半には、人口増に伴い、また新しい大地を求めて、スラヴ人はヴィスワ流域へ、そしてバルト海沿岸へ動き始めるのである。この西方向への移動は数世

紀にわたって続き、やがてエルベに達し、またエルベを越えるのであるが、当然その移動はゲルマン人によって阻まれることになる。その結果スラヴ族の中には、その後ゲルマン化されて行ったものもある。また6世紀には、スラヴ人はバルカン半島への植民を開始し、9世紀迄にはヨーロッパ中部から西ヨーロッパの一部にもまたがり、更に東ヨーロッパをも含めた広大な地域を領するに至るのである。こうしたスラヴ人の拡張は、漸く周辺諸族、諸民族の関心と呼び覚ますことになる。それが、1世紀から6世紀にかけてのローマ、そしてヴィザンツの文人、学者、軍人、政治家等の伝えるスラヴ人情報である。

さて、スラヴ人についての記述（だと考えられるもの）は、紀元1～2世紀に現れるものが最初である。すなわち、ローマの作家・学者・政治家であったプリニウス (Gaius Plinius Secundus 23-79年) の「自然誌」(Historia naturalis, 77年頃)、アレクサンドリアの学者プトレマイオス (Klaudios Ptolemaios 2世紀) の「地理学」(Γεωγραφικὴ ὑφήγησις), ローマの作家・史家タキトゥス (Publius Cornarius Tacitus 55-117年) の「ゲルマニア」(Germania, 98年) に現れるウェネディ、ウエネダイ (Venedi, Venadi, Veneti, Οὐνεδαί 等) である。プトレマイオスは、カルパチア山脈を「ウエネドの山々」(Οὐνεδικὰ ὄρη) とし、バルト海を「ウエネド湾」(Οὐνεδικὸς κόλπος) と呼んでいる。そして、「ダキアを取り囲む山脈」、即ちカルパチアの北方には「多数の種族」(μέγιστον ἔθνος) ウエネディが住む、としている<sup>18)</sup>。また、ローマ帝国の道路網を描いた、「ペウティンガー地図」(Tabula Peutingeriana) の名称で呼ばれる地図 (ローマ皇帝アウグストゥスの時、ローマ軍司令官アグリッパ Marcus Vipsanius Agrippa が作成した世界地図が4世紀頃実用的な道路地図に改定されたが、更に13世紀にアルザスの修道僧によってコピーされ、その後アウスブルグのコンラド・ペウティンガー Konrad Peutinger 1465-1547がこれを収蔵したもの。現在はウィーンの国立博物館所蔵) には、当時の旅行者が旅の途中通過しなければならない領域に住む種族の名称が示されており、そこに認められるウエネド人はダキア及びドナウ・ドネストル間の地域を占める、という<sup>19)</sup>。以上の資料を総合すれば、このウエネド人は、カルパチア山脈以北、バルト海に至る迄の領域を占めていたことになる。そして、例えば、ゲルマン語のヴェンデン、ヴィンデンがスラヴ人を意味してきたこと、ドイツ語のヴェンデン (Wenden) とその形容詞ヴェンディッシュ (wendisch) がソルブ人に対して、ヴィンデン (Winden) とその形容詞ヴィンディッシュ (windisch) がスロヴィンツ人に対して使用されること、印欧語以外では、フィンランド語のヴェネエ (venäjä), カレリア語 (フィン系) ヴェネエ (veneä), エストニア語ヴェネ (vene) はロシア人を、ハンガリー語のヴェンド (vend) がスロヴァニア人に対して用いられること等から、ゲルマン人もフィン人も自分たちの隣接種族であるスラヴ人をウエネディと呼び倣わして来たことが推定できるのである。しかし、一部スラヴ学者の中には——例えばレル・スプワヴィンスキーやイヴァノフ (Иванов, В. В.)——この語根 vent-をスラヴ祖語のウェンティ \*venti- (古スラヴ語ヴェンシチー ВѦШТИИ, 古代ロシア語ヴァチシー ВѦЧЬШИИ=「大きい」の比較級、従って、例えば「巨人, 大男」) に結びつけて、そこから「原初年代記」(Повесть временных лет) に登場する東スラヴのヴァチチ族 (вятичи) に同定しようとするものがあり<sup>20)</sup>, ま

た、語根 *vent-* の異形 *qd-* (古スラヴ語 *ѡда*, 古代ロシア語 *оуда*, ウクライナ語 *вудка*, ポーランド語 *wędka*) に関連させて「狩猟者, 漁猟者」を意味したスラヴ語とする者もあるが、ウェネディなる名称がスラヴ人の自称であった可能性は極めて少なそうである。この名称はケルト語起源 (*vin-* *dos* = 「明るい」の意) ないしはそれに比較的近い系統の言語から出た可能性が強いのである<sup>21)</sup>。例えば、ウェネティ = イリリア族 (ラテン語 *Illyrii*) とする説がある (泉井久之助「ヨーロッパの言語」)<sup>22)</sup>。同氏によれば、イリリア人は、紀元前2000年紀にバルト海から西ドイツ北岸地方一帯にかけて居住し、諸方面に移動したものの一部はポー川 (イタリア北部, アルプスに発し, アドリア海に注ぐイタリア最大の川) 流域, バルカン更にギリシャにも及んだ有力な古族であり、古くはヴェネチア族即ちウェネティ族であって、その言語はイタリア語の一方言であった、というのである。従って、ここから引き出される結論は、バルト海沿岸地帯の先住イリリア族 = ウェネディがバルカン半島へ南下してのち、代わってバルト海沿岸に出現したスラヴ人を、ローマ人やゲルマン人が先住種族ウェネディと混同して、同じ名称で呼び続けたということになる。実際、この語の痕跡はヨーロッパ各地に残っている。例えば、ウィーンの古名ヴィンドボナ (*Vindobona*), イタリアの都市ヴェネツィア, バルト海沿岸の地名ヴェンタ (*Вента*), ヴェンデン (*Венден*), ヴィンダヴァ (*Виндава*) 等がそれである。

スラヴ人についての更に詳しい記述が現れるのは、紀元6世紀以降である。即ち、ウェネディに加えて、スクラヴェニ, スクラヴェノイ (*Sclaveni, Sclavani, Sclavini, Σκλαβηνοί, Σκλαβινοί, Σκλαυηνοί, Σκλαυινοί, Σθλαβινοί; Sclavi, Stlavi, Slavi, Σκλαβοί, Σκλαυοί, Σθλαβοί* 等—当初は長語尾形が普通であったが、8世紀頃より短尾形が広がった) 及びアンティ, アンタイ (*Anti, Antae, Antes, "Ανται, "Αντες* 等) の名称が文明世界に知られるようになるのである。この種族名は、例えば、6世紀のヴィザンツの史家プロコピオス (*Prokopios Caesariensis*) の「ゴート戦記」(*De bello Gothico*. 551–554年), ゴートの史家ヨルダーネス (*Jordanes, Jordanis*) の「ゲタエ人の起源と活動について」(*De origine actibusque Getarum. Getica*. 551年), 6世紀末～7世紀初めのヴィザンツの作家マウリキオス某 (*Pseudo-Maurikios*) の「軍事戦略論 (ストラテギコン)」(*Στρατηγικόν*)—写本の中には、マウルキオス帝 (582～602年在位) の筆になるものとするものもあって、最終的には筆者不確定のため「某」(*Pseudo-*) を付して呼ばれる—, あるいはまた7世紀初めのヴィザンツの史家テオフィラクテウス・シモカッタ (*Theophylactus Simocatta*) 等の史書に見ることができる。また、6世紀のヴィザンツの史家メナンドロス (*Μενανδρος*) も「アント族の族長」(*ἄρχοντες Ἀντῶν*) について言及しているのである<sup>23)</sup>。なお、ヨルダーネスはウェネト族を起源とし、ウェネト人の一派たるスクラウェン人とアント人という三種のスラヴ人を、プロコピオスはスポロイ (*Σποροί*) 族を祖先とするスクラウェン人とアント人という三種の種族名を挙げているのである。それに対して、マウリキオス某やテオフィラクテウス・シモカッタが挙げるのは、スクラウェン人とアント人の二種族である。何れにしろ、これらの記述から、6世紀に達する頃には既にスラヴ世界はその種族的単一性, 統一性を維持し得ず、従ってスラヴ祖語はその方言的分化と祖語崩壊の過程を辿り始めていたことを窺い知る

ことができるのである。

ヨルダーネスは、上記<Getica>の中で次のように記している：「北方向へ傾斜するカルパート・アルプスの左斜面にあっては、ヴィストラ川の源から始まって、無限に広がる広大な地域に多数のウェネティの種族が住んでいる。それらの呼び名は今日では出身氏族の違いや土地毎に異なっているが、彼らは特にスクラウェニとアンティと呼ばれている。スクラウェニはノヴィエトゥヌムの町とムルシアヌスと呼ばれる湖からダナストルに至るまで、また北はヴィスクラまでの間に住んでいる。彼らの所には町はなく、沼沢と森林がそれに代わっている。一方、アンティは——両種族中最強であるが——ダナストルからダナブルまで、ポントスの屈曲する辺りに拡がっている。これらの川相互間の隔たりは、相当の行程を要するほどである」、「これらのウェネティは、…同じルートに端を発して、今ではウェネディ、アンティ、スクラウェニの三つの名称で知られる」（以上ロシア語からの重訳）<sup>24)</sup>。この記述から、当時のスラヴ人特にウェネド人の居住域が、カルパチア山脈以北、ヴィスクラの発する所即ちヴィスワ上流域の無限の大地に拡がっていたこと、ウェネド人の南側にはダナストル即ちドネストル川を挟んで西側にスクラウェン人、東側はダナブル即ちドネブル川に達するまでのポントス（黒海）のカーブの多い地域にスラヴ最強のアント人が居住していたことが判断できるのである。

一方、ベリサリオス司令官 (Belisarios 504-565) の顧問として、ペルシア、バンダル、東ゴート遠征にも参加したプロコピオスの「ゴート戦記」は、同司令官が、帝国を脅かす蛮族の跳梁、跋扈に苦しみながら、荒野の厳しい自然の中でも耐え抜く蛮族の強さの秘密を知るべく彼らを生け捕りにする方策を練るため、自軍の中のスラヴ族を使ってその巧みな兵法を学んだこと、また、当時のスラヴの戦闘集団、言わばスラヴ軍団が無敵の強さを誇り、最強の誉れ高い砦さえも陥落せしめ、性別・年齢の如何に関わらず手当たり次第に奴隷化ないしは殺戮を敢行、あるいは金品を略奪する、といった行為を働いていたこと等を報じている<sup>25)</sup>。そして「これらの種族、即ちスクラウェニとアンティは、一人の人物による支配を受けず、古くから民主制のもとで生活し、従って、彼らは人生の幸も不幸も共通のこととする。その他あらゆる点でこれら両蛮族の生活全体、法は同じである。彼らは、雷（いかづち）の創造者たる神のみが唯一万物の支配者であると考えており、その神に雄牛の生贄を捧げたり、またその他神事を執り行う。彼らは、宿命というものを認めず、一般にそれが人々に対して何がしかの影響力を持つとは考えない。そこで、病魔に取り憑かれたり、戦場で危機に陥って、死の脅威に曝されると、救ってもらえるならば直ちに自分の魂に代わる生贄を捧げます、という約束を行う。死を回避すると、約束したものを生贄に捧げ、その救いはこの生贄の価値によって購われものだと考えるのである。彼らは、川とニンフとその他あらゆる神を敬い、それら全てに生贄を捧げ、その生贄によって占いを行う。互いに相当遠く離れて、粗末な小屋に住み、全員が度々居住地を変える。戦闘に出る時には、彼等の多くは手に楯と槍を持って敵に進攻するが、鎧は決して着用しない。また、ある者は上着も外套も着けず、腰の上を広帯で結んだズボンをはき、そのような恰好で敵との会戦に臨む。どちらの種族も、同じ言葉を話す。かなりの野蛮語である。

外見は互いに区別できない。非常に背が高く、大力である。皮膚の色は真っ白で、毛髪は金色か、あまり黒くないが、黒ずんだ赤色を帯びている。彼らの生活様式は、マッサゲタイ人と同じく、粗野であり、生活設備は拙劣で、いつも泥にまみれているが、芯は悪くなく、決して凶悪ではない。ところが、フン族の習俗は全くそのまま残している。かつては、スクラウェニとアンティの呼び名も同じであった。古くはこれら両種族はスポロイ（『分散したもの』）と呼ばれていたが、思うに、これは彼らが幾つかの集落毎に別々に『散らばった』（*σποραδην*, スポラデーニ）場所を占めて暮らしていたからであろう。その故にこそ、彼らは土地も広く領する必要があるのである。彼らは、イストロス川の対岸沿いに広大な土地を占めて生活している」（ロシア語からの重訳）、というのである<sup>26)</sup>。この記事からは、イストロス川（ドナウ川）以北に広大な土地を占め、アニミズム信仰とりわけ雷神を尊び、戦時民主制（*военная демократия*）に従って生活し、巧みな戦法と強力な軍事力を持った蛮族としての原始スラヴ人の形象が浮かぶのである。但し、「スポロイ」の語源をギリシャ語「スポラデーニ」から引き出すプロコピオス説はあやしいと言われている。フィリンによれば、「スポロイ」は本来スラヴ人の自称であり、従って原初的にスラヴ語なのであって、古代ロシア語の「スポル」（*споръ*=増大、増加している、の意）や「スポルィニャ」（*спорыня*=豊富、多量、の意）等と同じ類の語である、という<sup>27)</sup>。

さて次に、マウリキオス某の「ストラテギコン」の中のスラヴ人はどうであろうか。「スクラヴェノイとアントイの種族は、生活様式や習俗の面で、また自由を好むという点で似通っている。その地では決して彼らを奴隷化したり、服従させたりすることはできない。…自分たちの地に来る他国者にも温かく接し、その現在地を教えて、一つの地から別の地へ移動する時も必要ならば警護をしてくれる。…多数の様々な家畜や大地の賜物…とりわけ黍と小麦を有する。女性の慎ましやかなること、いかなる人の性をも凌ぐ程であり、それ故その多くは夫の死を自らの死と心得、生涯のやもめ暮らしを考えず自らの命を絶つのである。森の中や通行困難な川、沼沢、湖の近くに住み、当然彼らに起こる危険に備えて住居には多くの出口を設けている。自分の必要な物は秘密の場所に埋め、どんな余分なものも公然とは持たず、放浪生活をおくっている。密林や山峡、切り立った崖地で敵に相まみえる事を好み、自分たちの得意技として、昼夜の別なく伏兵、不意打ちを用いる他、多くの諸々の手段を考案している。彼らは渡河にも練達し、この点では誰よりも優れている。また、水中にも勇敢に耐え、時に家に居残って急襲を受ける者があると水中深く潜る場合がある。この場合、彼らは水面に届く程の特性の大きな、内部を穿った葦を口中に含み、自身は川底に仰向きになって、その助けを借りて呼吸を行うのである。これを長時間行うため、彼らが居るのか居ないのか全く見当がつかない有り様である。各人は二本の小槍で武装し、また丈夫であるが携帯不便な楯を持つ者もいる。彼らはまた木製の弓を用いる他、矢用の特殊な毒に浸した小さな矢を使っている。それは、この傷を受けた者が予め解毒剤を用いるか、熟練した薬師（くすし）の知る別の補助手段を使うか、あるいは毒が身体の他の部位に拡がらないように傷口の回りを切り除く、という処置を施さない限り、強力な効き目を示す毒なのである。彼らは首長を持たず、互いに反目し合って戦闘

隊形を知らず、また規律ある戦闘ができないから、見通しの利いた平地に現れ得ない。戦闘を敢行するに至るや、叫び声を上げて少しずつ一斉に前進する。そして敵がその声に驚いてたじろぐや、強く前進攻撃に転ずるのである。さもなくば、白兵戦での敵軍の兵力を測ろうともせずに逃亡してしまうこともある。森林が大きな支えとなる為、彼らはそちらへ向かうが、それは狭い場所での戦闘が得意だからである。また、度々、運搬中の獲物を慌てて投げ出して、森の中へ逃げ込む様に装いながら、後で攻撃軍が獲物に飛びかかるや、すぐに立って敵に害をもたらすのである。これは全て、彼らが敵を欺く為に考案した様々な方法の熟達の手である、ということである」(ロシア語からの重訳)<sup>28)</sup>。ここに述べられているスクラヴェン人とアント人の形象は、概ねプロコピオスの記述するそれと一致していることが分かる。即ち、彼らは互いに種々の面で似通った種族であること、彼ら自身の社会内は無階級社会であること、主として川、沼沢、湖等のそばに居住し、様々な工夫を凝らしたゲリラ的兵法を得意としたこと等が窺えるのである。

ところで、これら文献に現れるスクラヴェニ(スクラヴェノイ等)及びアンティ(アンタイ等)なる名称の起源についても、様々な仮説が存在しており、今尚確定したものはない。先ず、スクラヴェニ等であるが、恐らくはスラヴ祖語のスロヴェーネ \*slověne(単数スロヴェーニン \*slověninъ)やスラーヴィ \*slavi に対応する語であり、ラテン語やギリシャ語が語頭では [sl-] の子音群を嫌い、skl-, stl-, σκλ-, σθλ- のように [k] [t(h)] の要素を挟んで、スラヴ語を写し取ったものであろう、と考えられる。聞こえ増大 (Sonoritätswelle) の原理によって子音群 (consonant cluster) を構成した古スラヴ語が、一方では、歯擦音から流音への急激な聞こえの差を避けるべく歯擦音、流音間に破裂音の要素を挿入した、と言われるが、そうした例は10~11世紀の写本においてしばしば見られるところである (СТРАМ, РАЗДРЪШИТИ 等)。更に、この歯擦音と流音との間に閉鎖音を挟んで子音群を構成する癖が、ソルン (Солунь)——ギリシャの都市テッサロニケ(ラテン名サロニカ)のスラヴ古名。スラヴ文字の考案者キュリロス、メトディオス兄弟の生地——方言に淵源をもつ現代のマケドニア地方(ギリシャ北部)のスラヴ方言において行われている (стреда, страм, здрее 等)<sup>29)</sup>、ことも興味を引く。さて、このギリシャ語、ラテン語の短尾形 (Σκλαβοι, Sclavi 等) は、8世紀頃より「奴隷」の意も帯び始め、西陲世界に拡がって行くのであるが (cf. ラテン語 sclavus, フランス語 esclave, スペイン語 esclavo, ドイツ語 Sklave, 英語 slave 等), それは西欧世界で奴隷として取り引きされた当時の一部スラヴ人の運命を反映したものであろう。また、13~14世紀頃より、スロヴェーネはスラーヴァ (слава < \*slaqa = 栄光, 誉), スローヴォ (слово < \*sloqo = 単語, 言葉), スルーチ (слоути < \*sloqti = ~として聞こえる, ~の名で通る) といった語との関連が意識され始める。即ち、「誉れ高き」種族, 「言葉 (のできる)」種族 (cf. ロシア語 ニェモイ немой = 無言の, 啞の; ニェメツ немец = ドイツ人) といった語源との関連である。この語源説は比較的有力なようであるが、問題がない訳ではない。先ず第一に、形態面から見れば、スラーヴァからはスラヴェーネ (славѣне), スローヴォからはスロヴェセーネ (словесѣне, スローヴォは古くは所謂子音幹名詞, この場合 s 幹名詞であって、古い語幹はスロヴェース слов-ес-) が形成されねばならないが、実際に



は存在しないこと、第二に、「誉れ高き」とか「言葉(のできる)」とかいった意味を持つ人種名が印欧語には存在しないことから(アルバニア語の例外を除いて)、スラヴ人の自称がそうした特殊な名称であった可能性は薄いというのである<sup>30)</sup>。その他、スローヴィ *\*Slovy* という地名を仮説してスロヴェーネを説明するもの、また印欧語 *\*slavos* > ギリシャ語 *λαος* (人々, 民) に関連させて、スロヴェーネが正に「種族構成員」を意味した、とする説(ベルンシュタイン *Бернштейн, С. Б.* も)、あるいはまた、ローマ人が買いつけた大量のスラヴ人奴隷の名前にボゴスラーヴ、ボリスラーヴ、ミロスラーヴ、ヤロスラーヴ等スラーヴ (-славъ) の要素を持った者が多く、それをローマ人が普通名詞として取り入れた、とする説(ボドゥアン・ド・クルテネ *Baudouin de Courtenay*) 等があるが、どれも決定的な証明力に欠けるのである<sup>31)</sup>。また、スロヴェーネが、原初的にスラヴ人一般の総称であったのか、あるいは、初めは一部のスラヴ人のみを指しながら後になって一般化したのか、ということも未解決のままである。

アンティについても、不明な点が多い。シャフマトフは、それを東スラヴ族の祖先と考え、ニールレは東スラヴ族南群、スレズネフスキー (*Срезневский, И. И.*) はウリチ族とチヴェルツィ族(いずれも黒海北西沿岸地方にいた東スラヴ族の一派) を想定する、という具合である。何しろアント人情報を伝える資料は唯一ヴィザンツやローマのものであって、しかも最大の難点は、それが極めて短期間しか登場して来ないということである。既に見たように、アンティについて初めて言及したのはヨルダーネス(551年)であるが、この名称はそれから50年程経過した7世紀初頭にはもう永遠に文献から消えるのである。即ち、先に挙げたテオフィラクトゥス・シモカッタが「歴史」の中で、602年の事件としてアヴァール・カガン(可汗)のアント遠征を伝えた記事「ハガンは、ローマ人の襲撃を知って、ローマ人と同盟関係にあったアント族を殲滅すべく、アブシフと軍を派遣した」が最後である<sup>32)</sup>。何故アンティの名称が突如として消えるのか、またこの名称の由来は何か等謎が多い。フィリンは、ケルト語起源説(シャフマトフ)、イラン語起源説(この場合、「最果て、辺境」の人、の意とする)等様々な学説がこの名称の突如として消える理由を説明できないのに対して、チュルク語(アヴァール語)起源説はそれを良く説明できる、としている。チュルク・アヴァール族は、6世紀頃南ロシアのステップを通過して西に向かう遠征途上においてスラヴ人の一部を征圧し(猖獗を極めた支配者オブリ即ちアヴァールの、スラヴ人の一派ドゥレビ族に対する非道振りは、例えばロシア「原初年代記」にも見ることができる)<sup>33)</sup>、その結果スラヴ人にアヴァール人の従属的同盟者としての忠誠を誓うことを余儀無くせしめるのである。チュルク語 *ant* = 「誓約」、モンゴル語 *anda, and* = 「義兄弟」、によってこのことを確認できる、という。ヴィザンツでは、アヴァールと共に帝都に來襲するアヴァールの目下の同盟者としてのスラヴ族を区別して言い表すのに、アヴァール人の使うアントなる名称を借用したが、その後、この名称は「同盟者、義兄弟」の意から転義して「スラヴ族(集団)」を表すに至った。従って、アンティは、アヴァールの「従属的同盟者」と「スラヴ族集団の一」という二つの意味を持ったのであり、後者の意味は人種名にはよくある、個別によって全体を表すという意味拡張の結果(例えば、バルト族と隣接関係を有した

古代ルーシの種族の一つクリヴィチ **кривичи** の名称はラトヴィア語ではクリェヴス **krievs**=ロシア人、クリェヴ **krievu**=ロシアの)、ヴィザンツ等では時としてスラヴ族全体を表すべく使用されたが、実際に存在したアント人は東スラヴ族の南西群であった、というのである。言語学者フィリンによれば、この従属的同盟者スラヴ族が抑圧者アヴァールに対して峰起し、彼らとの誓約を破棄するに至った時、アントたることを止めたのであり、6世紀の史家、作家に短期間アンティの名が現れたとしても、それは単なる歴史的偶然に過ぎない、のである<sup>34)</sup>。しかし、このフィリン説に対しては、歴史学者国本哲夫氏が疑問を提出されている。国本氏は、ヨルダーネスのアント人記述(551年)はアヴァールの使節が初めてコンスタンティノポリスを訪れる(558年)より前であること、アヴァールが「アント」と呼ぶことを止めても、ヴィザンツで使用を止める必要がないこと、アヴァールの同盟者はアント人だけとは限らないこと、アント人はむしろヴィザンツの同盟者であってアヴァールとは敵対関係にあること、を挙げたあと、アント人の消滅はアヴァール軍の討伐を受けた結果、北へ移動ないしは殺されて、種族としての存在を止めたのであり、それ故ヴィザンツとの関係が切れ、ヴィザンツの関心を引かなくなったのだ、とされている。更に、氏はセドーフ(Седов, C. C. 考古学者)の「アント人とは、紀元前1000年紀半ばに、おもにドネーストルとドネーブル下流の間に住んでいた、スラヴ人の個別的な種族群であったと考えられる。おそらく、この種族群はその方言(アント方言)を持っていたであろう。7世紀の初めに、アント人はアヴァールによって壊滅させられた。アント人の集落の大部分は、そのさい消滅した。…北部地方のアント人の残存者は、古代スラヴの東南方言群(ブラハ式土器分化)と融合し、その文化を取り入れ、『アント』という種族名は忘れ去られたのである」を支持して、「アントの名の消滅は、アント人の種族群としての消滅を意味したとするセドーフ説に賛成する。そうすると、9世紀に古ルーシ国の成立に参加した東スラヴ人とは、アント人の子孫ではなく、アント人の一部を同化吸収したスクラヴェニ人(ブラハ・コルチャク式土器の担い手)であったことになる」と結論されている<sup>35)</sup>。東スラヴ人の構成は単一ではなく複合的なものである。

以上の資料や諸研究から見て、上述のように、ウェネド人は南北方向ではバルト海とヴィスワ上流の間(カルパチア最北端以北)、東西方向ではヴィスワ、ラバ川間に、ウェネド人の南側と南東部にはそれぞれスクラヴェニ人とアント人が黒海以北にドネーストル川を挟んで位置を占めるに至ったと考えられる。しかし単純にウェネディ、スクラヴェニ、アンティをそれぞれ現在の西スラヴ、南スラヴ、東スラヴの祖先とすることができないのは勿論である。個々のスラヴ語の成立をスラヴ祖語の分裂の結果として直線的に捉えることができないのであって、そこには個々の方言の収束過程(convergence)等の複雑な要因が働くのである。ただ、概ね紀元1世紀から6世紀にかけて、スラヴは先ず東西の二群に分化し、次いで西群からは西スラヴが、東群からは次第に南スラヴと東スラヴが分化して上のような位置に落ち着いたことが窺えるのである。こうして紀元1000年紀前半が終わる頃にはスラヴ祖語の方言分化が進んで、その統一性は失われていたと考えられるのである。

さて、ヴィザンツの文献からアントの名称が消えて約200年後、東西の史料にはロース(рос)な

いしはルーシ (русь) の名が拡がりを見せ始めるのである。しかし、このルーシの起源をめぐる問題は、ウェネディ、スクラヴェニ、アンティの問題以上厄介であって、18世紀以来今日まで、その間一時期ナチスのゲルマン選民史観に基づく政治的潮流も関わる等、200年以上の長い論争史を持つが、未だに決着は見えていない。大別すれば、ルーシ＝ノルマン説、即ち最初のロシア建国の起源をノルマン人の活動に求めるものとルーシ＝スラヴ説即ちそれをスラヴ人自身の手になるものと考ええる主張の対立である。

ルーシ＝ノルマン説が根拠とするところは、先ず第一には、「原初年代記」(「過ぎし年月の物語」) *Повесть временных лет* 等に現れる所謂ヴァリャーギ (=ノルマン) 招致伝説である(この「物語」の原本は1113年頃キエフのベチェルスキー修道院の修道僧ネストルによって編まれ、1116年にヴィドヴィチ修道院の修道僧シリヴェストルによって一部だけ改定がなされたものであるが、残っているのはその写本であって、その最古の写本がラヴレンチー本[1377年]である。ラヴレンチーとは、スズダリ公ドミートリーの為に写本を行った修道僧の名前である)。「原初年代記」の862年(ヴィザンツの天地開闢暦6370年)の記事によれば(記事の事件の年より凡そ250年程後に編まれたものであり、しかも残存している最古の写本はそれから更に250年程後ということになるが)、一旦海の彼方へヴァリャーギを追い払った筈であったスラヴ人氏族間に内紛が発生し、自治能力に乱れが生じたため、法秩序に従って自分たちを統治し得るような公 (князь) を求めて、彼らは「海の向こう、ヴァリャギのルシのもとに (к Варягомъ к Руси) 行った。このようにそのヴァリャギは自らをルシと呼んでいたからである。…チュヂ、スロヴェネとクリヴィチがルシに (ラヴレンチー本は主格 Русь。主格では意味が通じないため、ここでは他の写本によって与格 Руси の訳がつけられている)、『私達の国の全体は大きく豊かですが、その中には秩序がありません。公となって私達を統治するために来て下さい』と言った。そこで3人の兄弟が自分たちの氏族と共に選出され、ルシのすべてをつれて (попяша по собѣ всю Русь) 到着した」とある<sup>36)</sup>。その結果、長兄リュールクはノヴゴロドに、次のシネウスはペロオーゼロに、三番目のトルヴォルはイズヴォリスクに公座を占めたのであり、「これらの者から、ルシの国が呼び名を得たのである (отъ тѣхъ [Варягъ] прозвася Руская земля. [ ] 内の語はラヴレンチー本にはなく、他の写本によって補われたもので、отъ のニュアンスと共に問題になる箇所である)。ノヴゴロドの人々——これらはヴァリャギの氏族から出たノヴゴロドの住民であり、以前はスロヴェネだったのである」<sup>37)</sup>ということになっている。この記事の根拠にすれば、初めはヴァリャーギ (ノルマン人) のことをルーシと言ったのであり、それがのち11世紀頃より東スラヴ人を指すようになって行くのだ、と考えることができるのである。更にルーシ・ノルマン説を支えるのがルシ、ロシの語源である。即ち、ルシ、ロシなる語は古代アイランド語の語根ロス (rops-) に起源を持つ語だとし(例えば、ロースメン ropsmenn「漕ぎ手」)、ストックホルム以北の地名ロスラーゲン (Rorslagen>Roslagen) やフィン語ルオトシ Ruotsi「スウェーデン人」等が挙げられるのである。

ルーシ＝スラヴ説論者はルーシ、ロースの語源をスラヴ語に求めている。すなわち、黒海北部沿

岸地帯の古い地名にはロース (рос) の語根要素を持ったものが多いとされ、例えば、キエフ以南ドネプル右岸支流の一つであるローン川 (Рось) 等の水名が挙げられるのである。したがって、ルーシ＝スラヴ説では、ルーシという名称は原初的にはドネプル中流域にあった古いエトノスを表すのであり、それが後になって次第に他の東スラヴ人にも及ぶようになったとするのである。ルーシ＝スラヴ説を支えるもう一つの柱は、やはり「原初年代記」等に現れる、キエフの都の起源についての記事である。「原初年代記」は先ず冒頭部で「これは、どこからルシの国が起ったか、誰がキエフにおいてまず初めに公として治め始めたか、そしてどこからルシの国が始まったかの、年毎の物語である」<sup>38)</sup>と書く。そして、旧約聖書の創世記物語で繋いだのち、「スロヴェネ」のドナウからの分散とそこからドネプル流域にやって来た「スロヴェネ」の一派「ポリャネ」のこと、「ヴェリャギからグレキ〔ギリシャ〕への道」、聖ペテロの兄弟聖アンデレの布教の旅の話が続き、その後に「ポリャネは分かれて住み、自分たちの氏族を支配していたが、彼らはこれらの兄弟以前に（すでに）ポリャネであり、おのおの自分の氏族を支配しながら、自分の氏族と共におのおのの場所に暮らしていた。3人の兄弟がいた。一人の名はキー、もう一人の名はシチェク、3人目はホリフで、彼らの妹はリュベジであった。…そして（人々は）最年長の兄の名にちなんで町をつくり、その名をキエフと呼んだ。町の周りに森と大きな松林があり、獣の狩猟を事としていた。彼らは賢く思慮深い人々で、ポリャネと呼ばれた。彼ら（の子孫として）いままでキエフにはポリャネがいるのである。…キーは自分の氏族の公だったのである。…これらの兄弟の後、彼らの一族がポリャネの中で権力を持ち始めた (держати почаша княженьє)」という記事が置かれており<sup>39)</sup>、このスラヴ族の一つポリャネ族とキー兄弟による建都物語が、ルーシ＝スラヴ説の根拠となるのである。現代ソヴィエト史学は、欧米等のルーシ＝ノルマン説を斥け、基本的にはルーシ＝スラヴ説を取っている。そして、例えば「原初年代記」の現代ロシア語訳を行ったりハチョフ (Лихачев, Д. С.) はその注の中で、ヴェリャギ招致伝説の生み出された要因について、第一には古代、中世の歴史学は支配王朝の系譜を神話上の人物や外国人に求めて、その権威によって地元有力者間の軋轢、競争を排除しようとしたのであり、第二にそのことによってヴィザンツの脅威、侵害から政権を守ろうとしたのであるが、ノルマン人の場合は（ヴィザンツと異なり）、例えそこから権威を借りようとも、ルーシの国家にとっては脅威とはならなかったからである、という説明を行っている<sup>40)</sup>。その他多くの論点が見られるが、本稿の目的からして、ノルマン説かスラヴ説かについてこれ以上詳細に立ち入ることは控えておきたい<sup>41)</sup>。

次いで9～10世紀頃の東スラヴ人情報を伝える重要な史料はやはり「原初年代記」の記事である。その導入部の構成には、ドナウからのスラヴ分散の記事が含まれていることは既述の通りであるが、この部分を含めて「原初年代記」には次のような12の東スラヴ諸種族の名称が挙げられている。すなわち一番北にスロヴェネ（イリメニ湖畔）、その南にクリヴィチ（西ドヴィナ、ヴォルガ、ドネプル川上流域）、更にその南にドレゴヴィチ（ブリピャチ川北方）、ラヂミチ（ドネプル、デスナ川に挟まれる辺り）、ヴァチチ（ラヂミチの東方、オカ川中・上流、ドン川上流）、そしてさらに南へ

下ってポリャネ(キエフ地域、ドネプル右岸)とドレヴリャネ(プリピャチからドネプルに至る間)とセヴェリャネ(デスナ、セイム、スーラ川流域)、更に南のウリチとチヴェルツィ(ドネストル川と挟んでその西と東に)、そしてヴォリニャネ(=ブジャネ; ドレビに取って替わった; 西ブグ、南ブグ上流)、さらにその南西にペールィエ・ホルヴァティ(ガリチア地方)である。尤も年代記が最初に編纂される頃には以前の古い種族関係は既に存在していなかったと考えられる。従って、その種族名も余すところなく列挙されているとは限らず(ルィバコフ Рыбаков, Б. Ф. は、100~200の小種族が存在したであろうと考えている<sup>42)</sup>、しかも上の種族名の中には明らかに血統以外の関係、即ち地域的な関係で集団を形成した、と考えられる名称も混じっているのである(ドレヴリャネ древлане<木 древо, дерево, ブジャネ бужане<ブグ川 Бугь)。それら種族名も時と共に、例えばスロヴェネはノヴゴロド人に、ポリャネはキエフ人に、ヴァチチはリャザン人といった地域的な名称に替わっていくのである。チェレプニン(Черепнин, Л. И.)にれば、ウリチが年代記に最後に現れるのは885年、ドゥレビは907年、ポリャネとチヴェルツィは944年、ドレヴリャネは990年、スロヴェネは1036年、クリヴィチは1127年、ドレゴヴィチは1149年、ラヂミチは1169年、セヴェリャネは1183年、ヴァチチは1197年である<sup>43)</sup>。ここには、東スラヴの地にあつて、種族方言が崩れて次第に地域方言が形成されていく過程が読み取れるのである。

ところで、この「原初年代記」の記事を基にしたシャフマトフの、東スラヴ語の成立に関する仮説は有名である。彼は上の東スラヴ族を先ず北群、南群、東群の三群に分かつ。そして、北群にはスロヴェネとクリヴィチが、南群にはポリャネ、ドレヴリャネ、セヴェリャネ、ドゥレビ、ウリチ、チヴェルツィ、ホルヴァティが、東群にはヴァチチ、ラヂミチ、ドレゴヴィチが属し、北群はツォーカニエ(цоканье)を、南群は摩擦的後口蓋音( $\gamma = \gamma$ )を、東群はアーカニエ(аканье)を特徴とする、と説く。次いで、ウクライナ語は南群方言を基に、白ロシア語は南群及び東群方言を基に形成され、その際西スラヴのレッヒ群方言も若干関わったとする。また、ロシア語は東群及び北群方言を土台にしてるが、その内、北大ロシア方言は北群方言を基に、南大ロシア方言は東群方言を基にしており、中部ロシア方言は後に南北の大ロシア方言の相互作用と相互浸透の結果生じたものだというのである<sup>44)</sup>。シャフマトフ説は「非常によくできた仮説」だとされるが、一方では彼が各群の特徴としているツォーカニエやアーカニエ、 $\gamma = \gamma$ 、レッヒ群参与説等問題が多いと言える<sup>45)</sup>。

## 〔注〕

- 1) А. Е. Супрун, А. М. Калюта, Введение в славянскую филологию, Высшая школа, Минск, 1981, стр. 16
- 2) А. М. Селищев, Славянское языкознание, Учпедгиз, М., 1941, стр. 276
- 3) Т. Лер-Сплавинский, К современному состоянию проблемы происхождения славян, — Вопросы языкознания No. 4, 1960
- 4) Е. М. Галкина-Федорук, К. В. Горшкова, Н. М. Шанский, Современный русский язык, Лексикология. Фонетика. Морфология, Учпедгиз, М., 1957, стр. 29-30
- 5) Славянские языки (под ред. А. Г. Широковой и В. П. Гудкова), Из-во Мос. унив., М., 1977, стр. 7

- 6) Г. А. Хабургаев, Старославянский язык, Просвещение, М. 1974, стр. 15  
Энциклопедический словарь юного филолога, Педагогика, М., 1984, стр. 36–37
- 7) Ф. П. Филин, Образование языка восточных славян, Из-во АН СССР, М.-Л., 1962, стр. 88–90
- 8) Н. И. Букатевиц, С. А. Савицкая, Л. Я. Усачева, Историческая грамматика русского языка, Вища школа, Киев, 1974, стр. 39
- 9) А. А. Шахматов, Введение в курс истории русского языка, Научное дело, Петроград, 1916, стр. 25–49
- 10) Русский язык, Энциклопедия, Сов., Энц., М., 1979, стр. 223–224
- 11) А. И. Павлович, Историческая грамматика русского языка, Часть I, Учпедгиз, 1963, стр. 15
- 12) Ф. П. Филин, Происхождение русского, украинского и белорусского языков, Наука, Ленинградское отделение, Л., 1972, стр. 10–12
- 13) Ф. П. Филин, Образование...стр. 110–123
- 14) Ф. П. Филин, Образование...стр. 123–143
- 15) Ф. П. Филин, Образование...стр. 147
- 16) Ф. П. Филин, Образование...стр. 150
- 17) エンゲルス「家族、私有財産および国家の起源」にいう分類
- 18) А. М. Селищев, Славянское...стр. 14
- 19) Ф. П. Филин, Образование...стр. 51  
М. Петер, Историческая грамматика русского языка, I. Введение и фонетика, Tankönyvkiado, Budapest, 1969, стр. 13
- 20) Ф. П. Филин, Образование...стр. 52  
В. В. Иванов, Историческая грамматика русского языка, Изданное второе, Просвещение М., 1983, стр. 49  
Н. Н. Арбат, Ю. Г. Скиба, Древнерусский язык, Вища школа, Киев, стр. 17
- 21) А. М. Селищев, Славянское...стр. 4
- 22) 泉井 久之助, ヨーロッパの言語, 岩波書店, 1968, p. 149–151
- 23) А. М. Селищев, Славянское...стр. 4
- 24) Ф. П. Филин, Образование...стр. 54  
А. Е. Супрун, А. М. Калюта...стр. 149
- 25) А. Е. Супрун, А. М. Калюта...стр. 149–150
- 26) А. Е. Супрун, А. М. Калюта...стр. 150–151
- 27) Ф. П. Филин, Образование...стр. 58
- 28) А. Е. Супрун, А. М. Калюта...стр. 152–153
- 29) Г. А. Хабургаев, Старославянский...стр. 63
- 30) Ф. П. Филин, Образование...стр. 56
- 31) Ф. П. Филин, Образование...стр. 56–57  
А. Г. Преображенский, Этимологический словарь русского языка, Том 2, Гос. Из-во ин. и нац. словарей, М., 1959, стр. 318
- 32) Ф. П. Филин, Образование...стр. 59
- 33) 日本古代ロシア研究会 (国本哲男, 山口巖, 中条直樹他), ロシア原初年代記, 名古屋大学出版局, 1987, p. 11
- 34) Ф. П. Филин, Образование...стр. 61–62
- 35) 国本 哲男, ロシア国家の起源, ミネルヴァ書房, 1976, p. 145, 161
- 36) 同上, ロシア原初年代記, p. 19の訳
- 37) 同上, p. 19
- 38) 同上, p. 1
- 39) 同上, p. 8–10

- 40) Памятники литературы древней Руси 11—начало 12 века, Худ. лит., М., 1978, стр. 425  
ロシア原初年代記, p. 340–341
- 41) 国本 哲男, 同上, p. 372「東スラヴ南北二元説」と「第一陣ルーシ=バルト・スラヴ人, 第二陣ヴァリャーグ=ノルマン人説」が氏の仮説の二本柱だとされている。ルーシの語源については, П. Я. Черных, Очерк русской исторической лексикологии, Древнерусский период, Из-во Мос. ун. стр. 99–100
- 42) Н. Г. Самсонов, Древнерусский язык, Выс. школа, М., 1973, стр. 25
- 43) Н.С. Можейко, А. П. Игнатенко, Древнерусский язык, Выш. школа, Минск, 1978, стр. 16
- 44) А. А. Шахматов, Введение...
- 45) Н. И. Букатеви́ч, С. А. Савицкая, Л. Я. Усачева, Историческая...стр. 15–18